Title	思想の伝え方：インタープリテーションにみる啓発方法
Author(s)	木村, 美里
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-5：8-9
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2369
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

思想の伝え方
―インタープリテーションにみる啓発方法―

木村　美里

はじめに

Newsletter（19－3）において、今必要とされる人物像をテーマにイギリスの女性社会改良家オクタヴィア・ヒルと米沢藩主上杉鷹山について言及し、両者の精神的基盤における共通点を見るという試みを行なった。また、両者が思想的影響を受けた人物を挙げた際に、鷹山の場合には彼の師である細井平洲について記述した。平洲は折衷派ないし実学派の儒学者として認識されており、以下のことを常に説いた―「学問と今日とが二途にならざるように」（大西1944：268、269）。すなわち、学問と現実に隔たりがないようにということを意味し、学問の実践性を重要視したのである。このことは、研究領域であるオクタヴィア・ヒルの思想、「永続する精神」をいかに実生活に役立てるか、また、環境保全の思想を考察する際、研究対象の「思想」をどのような手段で効果的に人々に伝えるか、ということにおいてもキーポイントとなる。

自然科学などの分野とは異なり、人文学系、特に哲学、倫理学、思想史の分野は研究結果が実社会への貢献として明確に表面化し難い。これは実験結果のように目に見える成果の過程が存在するわけではなく、「精神」のような目に見えないものの「啓発」を扱うためである。利便性とデジタル社会の中で人々が夢や目的を失い、「希望学」という学問まで登場する今日において、教育―思想伝達、自己啓発、人材育成の領域がもつ要素は有益であり、この「目に見えないもの（思想）を伝える」というテーマは最も必要とされているのが実情である。

インタープリテーションにみる啓発方法

では、どのようにして思想を伝達し、他者の意識に留め、浸透させゆくのか。この方法はめまぐるしく変動する今日の課題の一つといえよう。当然のことながら思想の伝達という目標は、すでに多くの研究者によって模索されている。自らがこの課題に取り組むにあたり、オクタヴィア・ヒルとイギリスの環境保護団体ナショナル・トラストにおける「思想と実践の関係性」を研究したことを活かせる「何か」を探究する中で、インタープリテーションの存在に直面した。自然観察会へ参加した際に、実際にインタプリターとしてもご活動されている永石文明氏（東京農工大学農学部非常勤講師・環境教育学研究室客員教官、立教大学全カリ兼任講師）よりインタープリテーションについてお話を聞く機会をえたことがそのきっかけである。そこでこのインタープリテーションの手法に着目し、手がかりとしたい。

インタープリテーションとは、「自然・文化・歴史（遺産）をわかりやすく人々に伝えること。自然についての知識そのものを伝えるだけではなく、その裏側にある“メッセージ”を伝える行為、あるいはその技能」（レニエ 他2008：13）である。重要なポイントは「裏側にある“メッセージ”を伝える行為」、つまり「興味を刺激し啓発するという要素」（レニエ 他2008：17）である。インタープリテーションの特徴は知識や情報の伝達よりもむしろ、先述の通り啓発に重点が置かれる。インタープリテーションの基準として6つの原則を提起した人物にフリーマン・チルデン（Freeman Tilden, 1883－1980）が挙げられ、その原則は以下の通りである―1. インタープリテーションを受ける側（ビジター）の個性や経験に関連づけて行われなければならず、2. 単に知識や情報の伝達することでもなく、それを基礎とした啓発であり、3. あらゆる分野に対応可能な総合技能であり、4. 主旨は教えることではなく、興味の刺激・

啓発であり、5. 事物事象の一部ではなく全体像を提示し、相手の一部ではなく全人格に訴え、6. 対象となるビジター（年齢・性別など）によって異なるアプローチを用いる（Tilden 1977：9）。

上記のようにインタープリテーションでは対象が自然のみに限定されていない。それゆえに、この思想の伝達手段は専門領域を問わず、あらゆる分野で適応可能であり、全ての人々に対して分かりやすく伝え、意識させることができよう。それはすなわち、先述した平洲の「学問と現実に隔たりがないように」という考えの実現へとつながる。彼が高度な学問的知識を得ていながら、橋の袂で辻講釈を行い、文字も書けない庶民の啓発に貢献した例は、まさにインタープリテーションの例としても挙げられるだろう。また、インタープリテーションの特色のひとつである「語りすぎない」という点に関しては、無言の中に意味を「感じ取る」日本の伝統につながる考え方が垣間見える。

以上のような点から、インタープリテーションは啓発や感性における効果的な役割を果たすと同時に思想と実践との関係を結ぶ架け橋となる存在となりうる。

おわりに

今日環境問題における企業の社会的責任（CSR: Corporate Social Responsibility）が問われる中、学術における社会的責任もまた重要である。「思想」をわかりやすく人々に伝え、実生活に役立てること—それはすなわち、人文学の社会的貢献へと寄与する可能性を意味する。また、環境保護の思想を人々に伝え、保全の実践へと導く手段ともなりえよう。永石氏とは思想と実践の関係性についてインタープリテーションを通して深く探求する共同研究を今後行なえればという展望を語ったが、その実現へ向けて現在の研究を進めたいと考える。

参考文献

Tillden, Freeman. *Interpreting Our HERITAGE*. third ed., Chapel Hill: the University of North Carolina Press, 1977.

大西重直『鷹山公と平洲先生』（同文社、1944年）。

キャサリーン・レニエ、マイケル・グロス、ロン・ジマーマン『インタープリテーション入門——自然解説技術ハンドブック』食野雅子、ホーニング睦美　訳（小学館、2008年）。

（きむら・みさと　聖学院大学総合研究所特任研究員）